

健康に対する自己評価が乳がん患者のQOLおよび健康に関する態度や行動に与える影響

| | |
|--------|---|
| 著者 | 金久保 愛子 |
| 発行年 | 2018 |
| 学位授与大学 | 筑波大学 (University of Tsukuba) |
| 学位授与年度 | 2018 |
| 報告番号 | 12102甲第8868号 |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00156761 |

| | | | |
|---------|--|-----------|--------|
| 氏名 | 金久保 愛子 | | |
| 学位の種類 | 博士（看護科学） | | |
| 学位記番号 | 博甲第 8868 号 | | |
| 学位授与年月 | 平成 30年 11月 30日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | | |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 | | |
| 学位論文題目 | 健康に対する自己評価が乳がん患者の QOL および健康に関する態度や行動に与える影響 | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | 博士（心身障害学） | 森 千鶴 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士（保健学） | 柴山 大賀 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士（医学） | 坂東 裕子 |
| 副査 | 筑波大学助教 | 博士（看護学） | 福澤 利江子 |

論文の内容の要旨

金久保愛子氏の博士学位論文は、乳がん患者に健康状態を自己評価してもらった結果を提示することによって、QOL や健康に対する態度や行動に与える影響を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

【研究の目的】

著者は、乳がん患者について女性が多いことで子育てや家事、就労などに影響しやすく、また生存率が上がってはいるものの、手術によるボディイメージの変容があり、抑うつになりやすく、QOL が低いことを指摘している。そこで健康状態について正しく自己評価することによって、健康に対する態度や行動をポジティブに変化させ、それをその後も維持することが可能であると考えて研究を組み立てている。またタブレット端末に自己評価ツールを搭載することの有効性が示されれば、様々ながん患者への応用も可能であると研究の意義で述べている。

著者の研究は、乳がん患者が自己の健康状態を自己評価するためにタブレット端末を活用し、QOL 及び健康に対する態度や行動への影響を明らかにすることを目的としている。

【研究方法】

著者の研究は、東京都がん診療連携拠点病院に指定されている総合病院 1 施設に通院している乳がん患者 87 名を対象者としている。健康状態に対する態度や行動については、①健康状態の振り返り（4 項目）、②健康管理の具体的な取り組み（診療場面でのコミュニケーション 2 項目、家庭や職場での健康管理 3 項目）、③健康状態の相対的な評価（2 項目）、という 3 点について各項目 5 段階で回答を求めている。また著者は症状、生活に着目した SF-8、対象が重要視している点についての生活の満足度の 3 項目を含めて QOL と定義し、④がんに関連する症状に対する評価であり、「症状の強さ」と「症状による生活絵の影響」を示す M. D. Anderson Symptom Inventory、⑤「身体機能」「日常役割機能」「体の痛み」

「全体的健康感」「活力」「社会生活機能」「日常役割機能」「こころの健康」という8つの下位尺度からなるSF-8、⑥「健康・活動」「社会・経済」「こころ・自分」「家族」の4つの項目の重要度とそれに対する満足度を測定するQLI (Quality of Life Index) を用いて評価している。

さらにタブレット端末の使用可能性についての調査も実施している。

【結果】

研究の説明を行った87名の対象者のうち、ツール回答時点から1か月後までの完全なデータが得られた54名を分析対象としている。54名は全員女性であり、平均年齢は55.6歳であった。また診断から平均6年が経過していた。健康状態を振り返り、「受診目的、生活状況について説明する」、「診察時に自分の状況を説明する」、「家庭や職場で活動方法を理解する」、「健康状態を相対的に評価する」という回答があった。

また症状は、「症状の強さ」は平均1.52、生活への支障も1.30であった。健康関連QOL尺度であるSF-8は、標準化された値で8項目のうち身体機能は48.17、日常役割機能は49.22であった。生活の満足度を測定するQLI評価は19.94であった。

タブレット端末の使用時間は最短で7分、最長29分で平均13.11分であり、回答に負担に感じた者は少なく、健康状態を理解するために提示される他者の平均値と自己の値が示されることは「健康状態を理解するために役に立つ」という回答が多く、概ね使いやすく意義があるとの回答を得た。

本研究の対象者のうち健康状態や生活を振り返ると回答した者はSF-8の下位尺度で差異があることが認められている。

【考察】

本研究の対象となった50歳代半ばの女性乳がん患者は、診断からの時間が経過していたためか、症状が少なく、SF-8の得点も50歳代の一般的女性や国民の平均値と同様の値を示していた。また、QLI尺度得点もこれまでの研究で得られた安定期にある乳がん患者と同様の値であったことから、本研究の対象者は乳がんを患いながらも安定した生活を送っている状況が明らかになったと述べている。さらにタブレット端末を使用し、自己評価をすることによって乳がん患者が生活を見直し、自分の健康について考えることにつながったと述べている。

本研究において、初めてタブレット端末を使用した50歳代半ばの女性でも、概ね使いやすいとの評価が得られたことから、今後、がん患者の使用可能性について示唆が得られたと述べている。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、乳がん患者の健康状態を簡易に自己評価してもらえるタブレット端末を活用した自己評価ツールを作成したこと、自己評価することで乳がん患者が生活を見直し、自己の健康について深く考えている可能性が明らかになった。また評価ツールの利便性を明らかにしたことは、今後の乳がん患者活指導において大変意義深いと考える。

平成30年9月28日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(看護科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。